

風の便り(第49号)

発行日：平成16年1月

発行者：「風の便り」編集委員会

三つの社会化と三者連携 —「学校」は理解できるか？—

荒っぽい分析は承知の上だが、年の初めに思い付いたことがある。表題の三つの社会化とは、「教育」の社会化、「介護」の社会化、「養育」の社会化を意味する。三者の連携とは、保

育や介護を担当してきた「福祉」と地域社会の学習やスポーツ機会の創出を担当してきた「社会教育」と教科教育の専門機関である「学校」の連携である。

● 母の直観

ひよんな事から男女共同参画に関わって以来、改めて学ぶことが多かった。初めに「変わってしまった女」からの絶縁状を農村青年の結婚難の中に見た。若い女性は自分を見下す農村文化を認めない。中国地方を旅した時の峠道でいくつもの「国際結婚相談」の立て看板に巡り会ったのもこの頃であった。日本の若い女からそっぽを向かれた農村青年にアジアの女を世話しようという「商売」である。農村の指導者層はまだ気付いていないが、若い女性が拒否したのは、農業でも、農業青年彼自身でもない。彼らの背景を為している農村文化である。彼女達の背景には「母の直観」があった。最早、農村の母は自分が置かれた境遇に娘を置くこ

とはしない。彼女達の直感は農村文化の男女差別を見抜いている。彼女達こそが歯を食いしばって、やむなく耐えてきた本人だからである。したがって、農家の娘も農業青年には嫁がない。農村文化こそが女を見下す事を制度化し、正当化した「筋肉文化」の象徴であり、残滓である。地方の男性政治家が放置してきた伝統やしきたりの美名の中に女性を見下す「死角」があったのである。農業委員はもとより、区長も、PTA会長も例外なく男である。祭の総代に女になることはなく、子ども神楽に女児が入会を許されることも稀である。地方によっては女を「一人前」と扱わない「出不足金」制度が今も残っている。

● 目次 ●

1. 三つの社会化と三者連携

—「学校」は理解できるか？ P 1

2. 誰の味方か？ - 「女性の味方」と「論理の味方」 P 4

3. 民主主義の迷信 - リストラン「元気交差点」の破綻 P 6

4. 「衰弱と死に向かったの降下」

- 「介護予防の義務付け」 P 8

5. Message To and From P 10

6. 編集後記 古い手帳

- サミエル・ウルマンの忠告 P11

● 「学童」の奴

ところで今回、筆者が関わってきた小さな町で、担当者の熱意と町長の直観が一致して、遅蒔きながら「子育て支援のパイロット事業」が始まろうとしている。後発プロジェクトである分、先行の事例を分析し、参考にすることができる。事業の開発には、どこもそれなりに苦労しているのである。子育て支援プログラムが存在したとしても、なかなか「生涯学習」と「福祉」の連携にはなっていない。行政の縦割りは確固として動かない。”わがまちでは学校に「学童保育」を置いています”、と胸を張る担当者もいるが、実態を調べてみれば、運動場の片隅にプレハブ

を建てさせてもらって細々と間借しているに過ぎない。「居候」の「学童保育」は、教育委員会も、学校教職員も歓迎してはいない。”「学童」の奴！が窓ガラスを割ってねえ”と言う校長もいると聞いた。同じ学校の児童でも福祉プログラムの子どもは「学童」の奴！になるのである。校長ですらこのようなメンタリティであれば、まちの幹部に保育と教育の「融合」発想などあるはずはない。学校に「放課後児童健全育成事業」を間借させておいて、市長や議会が生涯学習宣言都市などと誇らしげな看板を立てているのは誠に笑止である。

● 「養育」の社会化 ―「次世代育成支援対策推進法」の制定―

筆者が関わっている試行の町は決して豊かではない。人口規模も小さい。「子育て支援」の実績も少ない。当然、あらゆる地域資源を総動員しなければ新しい時代の要請には応えられない。そこで、福祉分野の保育と社会教育をボランティア指導者で連結し、学校の協力を得て総合的な少年のための生涯学習プログラムを創始しようと思い立った。担当は発案者が所属する「女性政策係」と当該「係」が事務局を勤める「男女共同参画まちづくり委員会」である。依頼を受けて企画書を書きながら、なぜ社会はこれまで「プライベート」な領域であった子育ての支援をするのか、を考えざるを得なくなった。「私事」の社会化には理由があるはずである。荒っぽい分析ではあるが、以下のような分析となった。

近代国家は工業化に伴ってはじめに「教育」を社会化した。もともとは教育もまた「私的な領域」であった。近代学校が淵源とするものは基本的に「私塾」であった。寺子屋はもちろん藩校ですらその基本は「私事」であった。しかし、近代産業が興り、工業を基本とするようになって、労働力の「均質性」、労働者の「基礎学力」と工業に馴染んだ「生活慣行」が求められたのは当然であった。基礎学力もその均質

性も、工業製品の質の高さと均質性を保証する必須条件であったからである。かくして国家は「教育」を社会化し、標準化し、義務化したのである。

近年、国家は「介護」を社会化し始めた。従来の文化では、介護は教育以上に他者の介入を許さぬ「私事」の領域である。年寄りの面倒は家族が負うべき「私的責任」であり、他者の介入を許さぬ「私的領域」であった。ある町の公民館がデイ・ケア的プログラムを始めて、近所のお年寄りを招き始めた時、遠くの家族が「余計なことをしてくれるな！」、と怒鳴り込んだという。この話も公民館による「私的領域」への侵略と考えれば頷けることであろう。

しかし、社会の高齢化に伴って、老老介護の現実を突き付けられ、孤独死を突き付けられれば、すでに事態は待たなしである。現代の介護は個別の家庭、個々の家族の対応力量を越えている。国家が介入しなければ、現代の「姥捨て」が多発することは疑いなかったのである。東京新聞の著名なコラムニストが泣く泣く痴呆が進行する妻（当時77歳）を絞殺し、己も死のうとした事件はその走りであった。「民主主義」を掲げ、「人権」を掲げ、国民の安全が一番大事であると宣言した以上、社会がそ

の「建て前」の崩壊を防ぐためには、「介護」の社会化もまた必然だったのである。

そしてわが小さな試行の町がささやかながらいよいよ「子育て支援」のプログラムに着手する。それは男女共同参画の思想が持たした「養育」の社会化である。少なくともその走りである。自分の子どもは責任を持って自分で育てよ、というこれまでの文化が変質しようとしている。研修を通して知り合った福岡県のPTA会長は子育ての「製造責任」を主張する。育児は基本的に「私事」だ、というのである。しかし、大半の親はすでに聞く耳を持つまい。己の子育ての失敗を学校や社会のせいにするのは、すでに「製造責任」も、「私事性」も放棄しているからである。社会はPTA会長の発想とは逆の方向に動こうとしている。子育ての崩壊や子どもの間

題行動の多発は、保護者の「ミーイズム」による勝手主義や「子宝の風土」がもたらす過保護の副作用であることはこれまで論じた通りである。しかし、そうした事態への対処も含めて、根源的に「養育」の社会化を求めているのは「男女共同参画」の流れである。女性が男性と対等に社会参加を果たそうとすれば、事実上の男性の協力だけでは事態は打開できない。ましてや日本の男はまだまだ「変わりたくない」。それゆえ、「産む性」をサポートする「養育」の社会化が不可欠になったのである。「養育」の社会化こそが男女の対等を保証する必要条件になったのである。「次世代育成支援対策推進法」はそのような時代背景から生まれた。本命は「養育」の社会化である。かくして、時代は、教育と福祉のドッキングを要請する。

● 「融合」の必然

高齢社会における生涯学習と「介護」の社会化は内容的に重複する。未来の公民館は「デイケア・センター」を兼ねなければならない。今後の「デイケア・センター」は、生涯スポーツと生涯学習のメニューをふんだんに用意しなければ、熟年の「生きる力」の維持・存続はできない。別項「介護予防の義務化」で論じたように、ようやく厚生労働省が介護における教育の重要性を自覚したということである。

かくして、生涯学習と福祉の連携、更に進んで「学福融合」は未来の必然である。同様に、「養育」の社会化と「教育」の社会化も繋がらざるを得ない。「養育」は当然「教育」と内容的に重複している。かくして、児童福祉法は、従来の「学童保育」の概念を整理して、その第6条に「放課後児童健全育成事業」の一項を挿入したのである。児童を「健全」に育成するためには、保育も教育も同時に必要である。従って、「放課後児童健全育成」事業は「保育」という福祉と「健全育成」という教育の融合を目指すことになる。しかるに、そうした子ども達の「居場所」を作るためにも、学校施設の福祉への開放もまた必然である。まして財政難の時代、新し

い「箱物」は国民の許すところではない。コミュニティの活用を想定した学校施設機能の再定義、学校建築デザインの再検討は不可欠の課題である。小さな町の子育て支援パイロット事業が男女共同参画行政を事務局として、福祉と社会教育と学校施設利用の3者連携事業になるべき理由はここにある。願わくは、担当者の直観を町長、教育長が理解し、学校長が理解し、教職員を説得し得ることである。前号に書いたとおり、これまでの学校は典型的に「反」生涯学習的であった。学校は「特定の時期」に、「特定の場所」で、「特定の対象者」だけに、「特定の内容」を、「特定の指導者」だけが教える仕組みになっている。学校の論理は、施設管理が先行する。「部外者は学校に入れない」。「子どもたちの福祉よりは教室の整理整頓の方が大事」だという。学校施設は誰の金で作ったと思っているのか？これに対して、生涯学習の原理は自由と選択である。そのスローガンは「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」である。学校が「養育」の社会化を理解し得るか否か、小さな町の答がもうすぐ出る。■

誰の味方か？

－「女性の味方」と「論理の味方」－

男女共同参画の問題に触れて何回か書いたせいであろう。時々、あなたは「女性の味方」なんですね、と言われる。歓迎の意味でいわれる時もある。皮肉を込めて言われることもある。

私は「女性の味方」ではない、「論理の味方」である、と答えることにしている。もちろん、研究者がいかに中立を守っても、完全な中立はあり得ない。既存の価値からの自由を心がけても、究極的に己の立場を離れることは出来ない。その意味で筆者も K.マンハイムの言う「存在拘束性」から自由ではあり得ず、M.ウエーバーのいう「価値判断排除」を完全に守れるはずもない。それでも第一義的に、研究者は誰の味方でもない。「論理の味方」でありたい。

人間が特定の価値や立場から自由になれないとすれば、実存主義者が主張したように、逆に、自分の生きようとする立場を鮮明にして、その立場に積極的に関わった論理展開をすればいいと考えている。依って立つ価値を明らか

にするとして、筆者の「立場」とはなにか？自分が依拠している立場を思想的に何と表現することが適切なのか具体的な表現を知らない。しかし、大切なのは人間の自由と公正と合理性を保証する社会である、と考えている。

それゆえ、我が男女共同参画の小論を追えば、現象的には「女性の味方」に聞こえるであろう。女性は社会において、自由と公正と合理性を保証されていない。多くの「人権主義者」ですらも実際生活において女性の自由と対等を認めてはいない。多くの「人権論」はそれぞれの論者が関心を寄せる特定グループの人権擁護論に陥っていることが多い。それは論者が「誰かの味方」ではあっても、「論理の味方」ではないからである。

論理に照らせば、女性の自由と公正、その二つを保証するシステムの合理性を妨げているのは男性であり、「筋肉文化」である。筆者はこのことを筆者が目標とする社会の「理想型」に照らして論じている。

「少子化」問題を解決しようとなれば、現在女性が置かれた家事・育児の家庭状況／社会状況を男性と共同参画ができるように変えなければならない。それは男性の意識変革の問題であり、子育て支援や育児休暇など制度の問題である。また、社会が女性の人的能力を有効に活用しようとするれば、女性の社会参画を促進し、意志決定プロセスへの女性の登用を促すことが論理的な帰結である。男性の能力は現行制度の限界まで開発が試みられている。相対的に、未活用・未開発は女性の能力である。ターマンの「天才の研究」が示したとおり、「女性天才」の能力は、同じ「天才」であるにも関わらず、「男性天才」に比べて、社会に発揮される率が著しく小さい。「女性天才」がその才能を発揮できなかった理由はたった一つである。彼女達が現行の社会システムの中で、「時と所」を得なかったからに外ならない。心理学の定義に従う限り、「天才」に男女の違いはない。男性の「天才」がそれぞれに社会的業績を上げているのに、女性の「天才」が自分の能力を発揮できないのは、社会の処遇に問題があることは九分九厘間違いない。人的資源の活用の観点からも、男女共同参画が不可欠であることは自明であろう。

もちろん、「自由」や「公正」の原則に照らせば、女性に対する社会的不公平も明らかであろう。日本の「筋肉文化」は生易しいものではないのである。かくして、「少子化」対策の視点からも、「人的資源」の合理的活用の視点からも、「男女の平等・公平」の視点からも、女性に対する「暴力的犯罪防止」の視点からも、論理的に分析すれば、結果的に女性の肩を持つことになるのである。男達は論理が解らないのではない。小論に対する同感も来ないが、反論も来ない。ただ、ひたすら沈黙が続くのは、ただひたすら「変わりたくない」からであろう。古人は、“女子と小人は養い難し”と言った。人類発生以来培われた男のちゃちなプライドも同様に養い難い。過日、小学校の男女混合名簿は思想的に問題があるので廃止を決定する、と宣言した新潟県の校長がいた。その時の紹介記事に筆者の提案を書いた。憶えておられるであろうか？「様々な理由から男女別々の名簿に戻すのもいいでしょう。但し、今回は従来の慣行を捨てて、女子の名簿を男子の名簿より先にすることが出来ますか？」

人間の平等とシステムの公平原則を忘れ、思想の名を借りて、男社会のプライドを守ろうとするのは感情的な「小人」の嫉妬に過ぎない。

民主主義の迷信

ーリストラ「元気交差点」の破綻ー

全員対等の原則

年末のテレビでリストラされた人々がつづいたリストラ「元気交差点」が破綻した事情が紹介された。失敗の原因について当事者や飲食業の専門家の分析を紹介していた。破綻の原因は複数指摘された。それらは立地であり、サービス精神であり、飲食業が本当に好きだったか、という経営感覚の問題であった。しかし、その中で触れられなかったものが一つだけあった。それは「全員対等の原則」である。勤務者の時給は一律千円、職務内容に関わらぬ報酬であった。それが組合活動を経験した責任者の誇りのようでもあった。思うに、破綻の真の原因はそこにある。職階性を廃止したフラットな組織がもてはやされ、対等、平等の人間関係が歓迎される時代であるが、リーダーを欠けば、物事が進まないことは歴史に明らかである。辛いことを指示する権限と判断を有しない時、事態に対応は出来ない。リーダーはフォロワーの何倍も苦しむのである。権限と判断の移譲は、「みんな同じだ」という対等・平等の人間関係ではできない。日産自動車再建時の工場閉鎖を

考えてみればいい。終身雇用文化の中でリストラが行なわれる事実そのものを考えてみればいい。誰かが決断しなければ組織は変わらない。時代の中で組織も仕組みも制度疲労を起こしている時、変わらない組織はいずれ沈没する。

変革を実行する者はその被害を受ける者から恨みを買ひ、非難を受ける。人間は総じて変化を好まず、安住を選ぶ。自己の利害得失については論理を無視しがちでもある。まして、組織における他者の評価や批判は受け入れない。みんな対等で、みんな平等で、会議をして総意で決めればうまく行く、と錯覚している。単純な民主主義の幻想であり、迷信である。100人の凡庸な決定が一人の優れた決定に及ばないことはいくらでもある。愚かなメディアが「世論調査」の数字を振り回すが、そんなものはなんの役にも立たない。「世論」が間違っていることは山ほどある。民主主義の建て前の手前、「世論」がアホ！だとは言えないだけのことである。

ドイツ社民党のエリート大学構想

ドイツZDFのニュースは、ドイツ社民党のシュレーダー首相が10校の大学を選んで研究・教育の資金を重点的に投入し、エリート大学を作ると発表した(2004年1月7日、NHK 衛星

放送)。大学の差別化である。社会変革の突破口は「革新者」が拓くのである。アメリカの心理学者ロジャースは社会変革の広がりや五種類の人々の層のパーセンテージを上げて説明

している。社会の変化も、組織の刷新も、「現状の打破を発案する『革新者(Innovator)』(約3%)から始まる。革新者の発想を「早い時期に受け入れる『初期採用者(Early Adoptor)』(約14%)」がそれに続く。両者の成功、定着を待って、初めて『初期多数派(Early Majority)』(約34%)が、続いて『後期多数派(Late Majority)』(約34%)が動く。最後はみんなが変わっても頑固に変わろうとしない『変革拒否の人々(Laggard)』(約16%)が取り残される。彼の研究が正しいとすれば、「革新者」はごく僅かしかない。もちろん、変革者は分野によってことなるが、どの分野にせよごく少数であることに変わりはない。彼らこそが変革のリーダーである。

人の世は人が造る以上、どの層も重要であることに間違いはないが、重要度は均等ではない。革新者が存在しない限り、変革は生じない。それが天才であり、発明者であり、発見者であり、政治的革新者である。リーダーがいなければ辛い決定は下せない。リーダーがいなければ閉塞状況は突破できない。教育の窓を通

してみる限り、「特区構想」のように小泉純一郎首相はシステムを変革しようとしている。今や「株式会社」が大学を作れるようになった。日本の教育免許状を持たない英語教員も誕生した。抵抗しているのは役所であり、学校であり、日本人である。マスコミのような気楽な連中は「改革の不十分」を指摘するが一度でも自ら改革に関わってみたらいい。自分では出来もしない、やろうともしないことを批判だけする。「日本人の敵は日本人」なのである。

商売も生涯学習も革新者が必要なことは同じである。社会がエリートを養成するということは、彼らに現状を突破する「革新者」になってももらいたいからである。「みんな同じ」のリストラ：「元気交差点」は「革新者」を制度的に否定している。誰も指揮を取れない。だれも困難な決断を下そうとはしない。それが真の敗因である。国民の公平、平等を政治的旗印とするドイツ社民党が敢えて「革新者」を創ろうとしているところにリストラ「元気交差点」にはなかった現実的対応の意義がある。

みんな同じであるはずがない

競争は差別を産むと言う。その通りであろう。しかし、無競争が差別を産まないわけではない。がんばる人も、何もしようとしない人も処遇が同じならば、それもまた形の異なる差別である。結果的に頑張る人を貶めることになる。システムの効率も落ちる。競争原理を排除した組織が競争原理で動いている組織に太刀打ちできないのはそのためである。能力も、個性もみんな同じであるはずはない。問題は競争結

果に伴う格差を一定の枠内に留める仕組みである。プロ野球や芸能人のような極端な市場価値の偏りを産まない工夫が大事である。競争主義と言うとすぐにアメリカ型の実力主義を持ち出し、弱肉強食のジャングルのような極論を言う人がいるが、要は、程度の問題である。日本には日本型の競争社会を創ればいいだけの話である。みんな同じであるはずはないのである。 ■

「衰弱と死に向かったの降下」

— 「介護予防の義務付け」 —

1月19日、日経の朝刊は「介護予防の義務付け」を一面トップで報じた。他の新聞はどうであつたろう。福祉の関係者もようやく「厄介老人」の発生原因に気付いたということであろう。いまだ現役の働き盛りで、想像力に欠けた人びともようやく加齢がもたらす、心身の機能低下の重大性を自覚したということである。したがって、熟年の衰弱は「介護保険」を破壊することに気付いた。記事によると、“掃除など介護の申請があつた場合でも、利用の前に介護予防サービスの利用を義務付ける”という。目的は“「身体機能改善」の取り組みを怠って状態が悪化するのを防ぐこと”である。当然、結果的に給付費を抑制したいわけである。

しかし、記事にある通り、彼らは「身体機能

改善」に限定して発想している。衰えるのは身体だけだと思っているからである。熟年期の問題をまだ理解していない。江戸時代の狂歌の方が事の核心を洞察している。曰く、『くどくなる、気短かになる、愚痴になる、心は僻む、身は古うなる』である。熟年期は、総合的に衰えるのである。肉体、精神、心気のエネルギー全てが下降する。衰えるのは感覚体のすべてである。筆者のように、すでに熟年期の真只中であつて、刻々と衰弱の過程を辿っている本人がいうのだから間違いはない。まだまだ元気な現役には衰弱の実感がないであろう。まだ、「そこへ行ったことのない者」に“分かれ！”、といつても無理なのかも知れない。そうであればなおのこと問題の所在は、当事者の熟年に聞べきである。

「学福」融合

健康の意識が高まって、確かに周りには様々な運動やスポーツに取り組む熟年者が増えた。しかし、彼らが同時に「頭」や「気」を使わなかった時、身体だけを鍛えても効果は十分ではない。人間は感覚体の総合である。一部だ

けの衰えを予防しても効果は上がらない。身体も使う。気も使う。頭も使う。そのための活動を発明しなければならない。だから生涯学習が必需品になったのである。縦割り行政の中で厚労省が「衰弱」の予防を義務付けたとして、誰が

総合的な予防プログラムを実施するのか？福祉には担当する専門家はいない。行政としての教育・スポーツ指導の経験の蓄積もない。そうなれば、生涯学習と福祉の融合こそが「介護予防」の処方箋である。生涯学習と生涯スポーツは衰弱の予防においてもっとも威力を発揮するのである。「学福融合」こそ介護予防の問題が投げかけた生涯学習の新しいステージである。公民館はデイケアセンターを兼ねて、デイケアセンターは公民館を兼ねる。熟年に関する限り社会教育単独の領域は消滅したのである。また、介護の予防を標榜して、心身の活動を促進しようとするのであれば、福祉は生涯学習や生涯スポーツにかなうはずはない。熟年期は心身の機能を総合的に駆使する活動プログラムを用意しなければ危機を回避することは難しい。

高齢社会の問題サイクルは次のように循環する。「高齢人口が増大し」→「加齢と共に」→「『労働』からの引退が『活動』の停止を誘発する」→「『活動』の停止は『生きる力』を

低下させ」、「心身の機能を衰弱させ」→「多くの高齢者が家族とシステムに不可避免的に依存せざるを得なくなる」→「結果として他者の厄介にならざるを得ない『厄介老人』が大量に発生し」→「介護保険・医療保険を破綻させ、併せて地域の活力も粉砕する」。地域の活力の低下、熟年の危機を回避するためには、問題サイクルを逆に辿らねばならない。

筆者の提案に対してある社会教育関係者から夫君を心配する個人的な感想が寄せられた。彼は、「仕事ひとすじ、休日はパソコン相手の囲碁と将棋、時々植木の手入れ、そして定年間近である。」現在、彼が仕事に投入しているエネルギーと思いのせめて半分でも振り向ける対象を発見しない限り、退職後の彼の熟年期は悲惨であろう。厚労省や文科省が老人クラブや高齢者学級に唱導してきたゲートボールやグランドゴルフ、歌と踊りと風呂に象徴される甘えに満ちた「パンとサーカス」の老人プログラムで高齢社会の生涯時間20年は生き抜けない。

第43 回生涯学習フォーラム“この指とまれ”

日時： 平成16年2月21日(土)15時～17時、のち「センター食堂にて夕食会」

場所： 福岡県立社会教育総合センター

テーマ： 幼児教育・保育における心身の「鍛錬」

事例発表者： 交渉中

参加論文： なぜ幼い時に鍛えるのか(仮題)(三浦清一郎)

フォーラム終了後センター食堂にて「夕食会」(会費約600円)を企画しています。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当：肘井)092-947-3511まで

MESSAGE TO AND FROM

沢山のメッセージをいただきました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、
お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたら
どうぞ御寛容にお許し下さい。

★ Web Site 安田智恵様

インターネット上のご意見にはご返事を差し上げない方針をとっています。しかし、今回ご指摘のことが現代の若い家庭が当面している共通課題に当たると考えて感想をしたためます。

母親の自立と子育ては両立しますよ。但し、男が家事・育児に物理的にも、心情的にも全面協力の姿勢を取ればの話です。専業主婦の孤独は、家事・育児の苛酷さではありません。”昔はみんなそうやっていたんだ”と先輩方がおっしゃる通りでしょう。しかし、”みんながそうしている時代”は労働は苛酷でも、心情は楽なのです。心理的には「貧しからざるを憂えず、等しからざるを憂う」ですからね。現代は違います。己が自立して、己の「個性」を受け入れ、己の「生き方」を納得し、他と比較せず、「等しからざる」を楽しむ、ということになりました。「自分の時代」が期待するものは「自立」と「個性」ですが、家事・育児の大部分は教育カリキュラムに例えれば、地味な「基礎」と「必修」の繰り返しです。応用問題や他流試合にこそ己の「個性」や「能力」が輝き、他者の認知もいただくことができます。「基礎と必修」だけの専業主婦にはその「舞台」がなかなか廻って来ないのです。今回、巻頭小論に「養育」の社会化論を書きました。男女共同参画の時代は基本的に「専業主婦」が消滅する時代と断言したら、またまた過激に過ぎるでしょうか！？しかし、この予言は当たると思いますよ。

★ 佐賀県伊万里市 吉原和子様

引き受けた仕事の関係で多くの男女共同参画に関する提言書を読みました。私が「筋肉

文化」の概念に辿り着くきっかけになった「出不足金」の撤廃を正面から文言として謳ったのは伊万里市ではなかったか、と思います。事務局として多くの御苦勞があったであろうと想像します。敵に廻した時、「伝統」と「しきたり」が最も手強い相手になるでしょう。背景には多くの人びとの支持があり、歴史が刻んだ時間の保護があり、いつの時代も仕組みの修正には多くの抵抗があります。本当にご苦勞さまでした。しかし、一息つく間もなく、労働からご自分の活動へ移行する時、おそらくはもっと手強い戦いになるのでしょうか？

★ 高知県高知市 明神 宏和様

年を重ねても如何にすれば先生のようにエネルギーと感性を持ち続けることができるか、是非ともご自分の生活の要素、方法を分析して、後進のために執筆していただけませんでしょうか？当面、私の教科書は藤沢周平の「三屋清左衛門残日録」ですが、高齢社会は様々な「残日録」を必要としていると思います。中・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会の準備を始めました。四国からの事例を楽しみにしております。

★ 沖縄県那覇市 仲田美加子様

お便りに「マニフェストは確実に実行しています」、とありました。「改革は楽しいもの」でしょうね。担当した大学改革で一度は言ってみたかったセリフです。うらやましい限りです。教育行政運営の理念を「学校を核とした地域づくり」と「市民参加の協働」に置くことは全く同感です。当方も「養育」の社会化を念頭において、ある町のささやかなお手伝いを始めました。しかし、

学校開放でも、学校との「協働」でも、協力依頼の経過を見聞して、学校の病いは深いですね。教育長の学校対応策をお教え下さい。今年から大学経営によりやく株式会社という「異業態」が参入します。これまでの「教授会」のような閉じられた運営組織は設置しない、それが

異業態参入の意味であり、教育、研究に「新しい風」が吹く条件でしょうね。従来の「職員会議」は外部関係者を入れた「学校運営協議会」によって代替せよ、と申し上げたら「気が違ったか？」と言われるでしょうね。フェスティバルの御縁で年度末には再び沖縄へ参ります。

過分の郵送料をありがとうございました。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| ● 福岡県穂波町 川原田寿史様 | ● 根県津和野町 増田清子様 |
| ● 福岡県宗像市 竹村 優・亮子様 | ● 沖縄県那覇市 仲田美加子様 |
| ● 北九州市 古川雅子様 | ● 山口県長門市 西本達夫様 |
| ● 長崎県西有家町 嶋田惣二郎様 | ● 北九州市 森 三保様 |
| ● 埼玉県上尾市 小倉新一様 | ● 福岡県久留米市 瓜生浩平様 |
| ● 佐賀県多久市 林口 彰様 | ● 高知県野市町 小松義徳・節子様 |
| ● 大分県中津市 本庄和徳様 | ● 北九州市 南 京子様 |
| ● 大分県日田市 安心院光義様 | ● 北海道札幌市 水谷紀子様 |
| ● 鹿児島県桜島町 竹ノ下武宏様 | ● 高知県高知市 明神宏和様 |
| ● 埼玉県八潮市 松澤利行様 | ● 福岡県穂波町 行徳良昭様 |
| ● 島根県益田市 渋谷秀文様 | |

◆ 編集後記 ◆ 古い手帳

—サミュエル・ウルマンの忠告—

暮れに大掃除をしていたら積み上げた書類に混じって一冊の古い手帳がでてきた。大部分は白紙のままであった。手帳の最後にサミュエル・ウルマンの「青春」の一節のみが写し取ってあった。今になって読み返すと、一行一行が当時の心境を反映している。

人は信念とともに若く

疑惑とともに老ゆる

人は自信とともに若く

恐怖とともに老ゆる

希望のある限り若く

失望とともに老い朽ちる

(サミュエル・ウルマン)

大学に関わっていた頃の最も苦しい時期の手帳である。最後は泥沼の紛争の中で、人事の面でも財政の面でも大学の機密に属する事件の処理を担当した。外国が舞台であったので英語で仕事をしなければならなかった。限られた人びとの支援は、時が時だけにどれほど有り難かったことか。しかし、その大部分は心

情的な支援であった。機密の問題があるので、苦労の中身は基本的に他者に説明することはできなかった。私の近くにいた(と思われた)人々が大学からも、自分からも次々と去って行った。人間嫌いになったのはこの頃のことである。親しげに振る舞いながら状況の意味が分からず、無責任な評論めいたことをいう奴は真底腹が立って許せず、いまだ許してはいない。人生には時にそのような季節が巡るのである。

事件処理の指揮をとった間は、疑惑と戦い、恐怖と戦い、失望と戦った。信念も自信も希望も失うことはなかった。罵詈雑言にも、犯罪者呼ばわりにも耐えた。しかし、事件処理のほとんどを終えた後、監督官庁の対応や後継者の振る舞いを目の当たりにして、戦いの意味を見失った。それゆえ、本当の疑惑も、恐怖も、失望も辞めた後にやって来た。戦っている間は大丈夫なのである。戦いの意味を見失った時が危機であった。

9年のブランクを経て、社会教育・生涯学習の研究者に戻った今、疑惑とも、恐怖とも、失望とも戦う必要がなくなった。したがって、組織の中で戦うための信念も、自信も、希望も必要ではなくなった。しかし、ウルマンの指摘通り、信念も、自信も、希望も、若さの保証であり、人間のエネルギー源である。エネルギーを作り出すためには、新しい”戦場”を発明しなければならなかった。「風の便り」を書き続けることはささやかな戦場の意味をもったのであろう。ボランティアで英語を教え始めたことも、毎月の生涯学習フォーラムに論文を提出し続けたことも同じ作用をしたのであろう。言葉の格調は及ぶべくもないが、ウルマンに真似て言えば、以下のとおりである。

人は努力の継続とともに若く

活動の停止とともに老ゆる

人は他者の承認とともに若く

孤立とともに老ゆる

自らの”戦場”とともに若く

”戦場”からの離脱とともに老い朽ちる

やりようによれば、生涯学習は熟年の戦場になる。「生きる力」の自家発電が可能になる。生涯現役とは常に己の戦い続ける対象を発明し続ける人を言うのであろう。お陰さまで来月は50号。これまでのご厚情に心から感謝申しあげる次第である。

『編集事務局連絡先』

(代表)三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵厳寺2丁目15-16

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。『編集事務局連絡先』まで 90円切手 11 枚 または 現金をお送り下さい。

* 尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。

『 オ ン ラ イ ン 「 風 の 便 り 」 』

<http://www.anotherway.jp/tayori/>